

2017年3月27日

資料室だより 102

蔵書案内

新刊ではなく、長く所蔵しながらも埋もれている資料のご紹介を続けたいと思います。

* 浅井寛子 : *Messa per organo* ME1/A798/1

本科卒業生でもあり、長くグレゴリオの家の典礼や教育に携わっておられた浅井寛子さんのオルガン曲です。「グレゴリオの秋」という催しで演奏された関係で自筆楽譜を資料室に所蔵しております。これは1994年、イタリア・ピストイアの聖ヤコポ・イタリアオルガン作曲コンクールに出品された作品で、レジストレーションの指示も当コンクールに使用された楽器に基づいています。5つの楽章から成り、即興性に富む音楽ですが全体はミサ曲4番として知られる「使徒のミサ」のキリエの旋律をモチーフとして統一されていますので（聖ヤコブの祝日に用いられることを意図していたため）、皆さんもグレゴリオ聖歌に基づく即興の勉強をするのにヒントになるかと思いここにご紹介します。5楽章というのは

1. Toccata - ミサの入祭前に弾かれる、
2. Meditazione dopol'omeria - 御言葉について黙想する。
3. Offertorio - 奉納行列のときに。
4. Comunione - 聖体拝領のときに。
5. Finale - 閉祭として、退堂のときに。

実際の典礼で用いることが想定されていますが、私はこういった霊的作品が教会の外で、コンサートの場においても人々の耳に届くことを願っています。

* *Codex Calictinus*(ヤコブ典礼音楽) MC6/W135/1

上記のオルガン曲が聖ヤコブの祝日のために書かれたものなのでその関連でヤコブ典礼の楽譜を紹介します。スペインの守護聖人として、サンチアゴ・デ・コンポステッラ大聖堂はヤコブの聖遺骨を埋葬して、大巡礼地になっています。大聖堂が所蔵する12世紀に編纂されたヤコブ典礼書（ミサ曲と聖務日課、行列聖歌、巡礼歌）のトランスクリプションが資料室にあります。多声楽曲（オルガヌム）も所収されることからノートルダム楽派のオルガヌムと並んで音楽史的に重要な写本です。資料室にあるのは音楽学者 Peter Wagner がアキタニア・ネウマから角型記譜法に校訂したものです。1~3声までの中世典礼音楽ですが他のヨーロッパ諸国から孤立したなかで発展したスペイン典礼音楽固有の激しい情熱がみてとれます。

また、Cornetto 社から出ています[Andando e cantando: Obeate Jacobe]MC1a/A543/1 は一般向けにアマチュアにも演奏しやすい五線譜記譜法でこのヤコブ写本を含め、他の様々なヤコブに関するルネサンス時代までの合唱音楽を所収しています。

杉本ゆり記